虚空遍歴

――映画文学人生論

山本周五郎 (1903-1967)
『虚空遍歴』(1963) 「新潮社」
『青べか物語』 (1960) 「文藝春秋」
『青べか日記』(1928-30) 「大和出版」
参考：木村久爾典『人間山本周五郎』(1968) 「講談社」

死ぬことはこの世から消えてなくなることではない。――消滅ではなく完成だ。

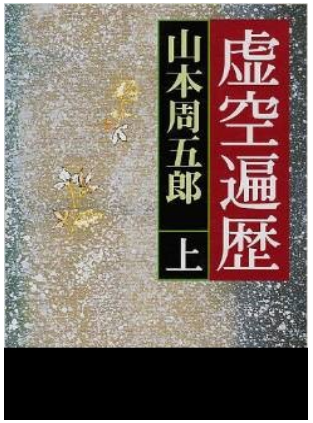
山本周五郎の長編小説『虚空遍歴』は、作者のノートによれば、もともと『青べか物語』の一つの章として物語られるはずだったという

『青べか物語』は三文文士の蒸気河岸の先生が昭和三年から四年頃、浦粕という漁師町の人々の暮らしをスケッチし、最後は町から逃げ出すまでの物語。一方、『虚空遍歴』は江戸時代後期の侍が浄瑠璃語り芸人になり、江戸、大坂、京都で志をとげることができず、北陸で窮死する物語だ。

時代と状況がかけ離れすぎて、『青べか物語』の一章とは考えにくいが、侍あがりの浄瑠璃語り芸人を蒸気河岸の先生の分身と考えれば、『虚空遍歴』は『青べか物語』とつながってくる。

中藤冲也は八千石の旗本の次男坊。十九歳のとき、家を出て、常磐津文字大夫の弟子となった。侍の身分を捨てて、芸人の仲間に入ったが、祖父の法要に顔を出すと、「芸人ふぜいと同席したくない」と親戚の一人に言われて怒った。

それに対して、「おまえにも怒る権利はない」と、父がたしなめた。「おまえは中藤家の人間ではないし、侍でもない。常磐津小松大夫という浄瑠璃語り、まちがいなく芸人なのだ。おまえが本当にその道で生きとおすつもりなら、芸人ということに誇りをもつ筈だ」。冲也は父の理屈に反論できず、頭を垂れた。



虚空遍歴 ――― 映画文学人生論

冲也は端唄の作者として名を知られていたが、それだけでは満足できず、新しい浄瑠璃、冲也ぶしを創ろうとする。新作の浄瑠璃に対する評判はおおむね好評だったが、生活の苦労を知らない作者の独りよがりの甘さを指摘する評もあった。

恵まれすぎている生活から脱皮するため、冲也は東海道を西へ向かう旅に出た。途中で、命を狙われたり、重病になるが、おけいという女があらわれて、彼を救う。おけいは冲也の端唄のファンであり、新しい浄瑠璃の冲也ぶしの理解者だ。

結局、冲也は志を得ぬまま北陸で死ぬ、「死ぬことはこの世から消えることではなく、その人間が生きていた、という事実を証明するものだ。死は、人間の一生にしめ括りをつけ、その生涯を完成させるものだ、消滅ではなく完成だ」。

しかし、虚空を遍歴したあげくの未完の死のようにも思えてくる。「なにか遺言のようなものはなかったかしら」と妻のお京はおけいに聞いた。おけいは三味線を取って、平戸侯松浦静山から依頼されたふし付けの曲を弾いた。「いい唄だわ」とお京は云った。「でも、こうなってみると、しょせんうちの人は端唄作者だったのね」。

蒸気河岸の先生もしょせん虚空を遍歴する三文文士か。それもわるくはないとは思うが。

おもい切ろうとあきらめて、それから恋になり
しとや、浮名も立たで、　　松浦静山